

1833年庄内沖地震の津波到達点の研究 －文献史料による新潟市内の検討－

矢田 俊文

1. はじめに

本稿の目的は、1833年庄内沖地震¹⁾における新潟市地域の津波被害²⁾を事例に、藩・庄屋等の確実な史料から近世以前の津波到達点を明らかにする方法を提示することにある。

藩・庄屋などの確実な史料が存在する18世紀以降は、文献を中心として津波到達点を明らかにすることができる。本稿では、比較的文献史料の多い18世紀以降の津波到達点の研究方法を提示したい。

2. 落橋と津波到達点

橋の破壊と津波の関係に注目した研究として、西山昭仁氏の研究がある³⁾。西山氏は1707年の宝永地震と1854年の安政南海地震の大坂市中での落橋状況を比較して、宝永地震の津波の方がより内陸側へ大船群を押し上げていたことを明らかにし、大坂では1854年安政南海地震時の津波よりも1707年宝永地震の津波の方が大きかったとしている。

新潟市地域を例に、津波と落橋の関係について考えてみよう。現在、新川と西川は交差し、新川の上を西川が流れている。新川は三濁悪水抜掘割のことで、文化15年（1818）に着工した工事によって出来た新たな川で、1833年庄内沖地震当時は、西川の下に底樋を通して海に水を流していた。新潟市歴史文化課架蔵伊藤家記録（新潟市歴史文化課架蔵伊藤家記録複写本）によると、津波は新川河口を遡り、底樋を通して、槇尾村（新潟市西区）の畑まで到達した。津波は内陸2.5キロメートルまで到達している。同史料には、津波が浜往来橋と内野往来橋（現在の三日月橋）の2つの橋を落とし、さらに内陸に入っていったことが記されている。津波による落橋は、津波到達点を確認する指標になるのである。

3. 近世新潟湊・新潟町への津波の到達―旧地形と津波到達点―

1833年庄内沖地震における新潟市地域の津波被害を例に、津波到達点と旧地形の関係を検討する。

「御留守御在城行事」（新発田市立図書館所蔵新発田藩史料）によると、津波による溺死者は、松崎浜村（新潟市北区）の3人だけではなく、河渡村（新潟市東区）にも1人いる。阿賀野川の河口はもとは信濃川合流部にあり、河口が現在の松ヶ崎浜村に移動したのは享保16年（1731）以降のことであり、松ヶ崎村から信濃川合流部に向かった旧流路は通船川となった。河渡村がかつての阿賀野川の旧流路であったのであれば、津波が阿賀野川の旧流路にそって河渡村まで遡上し、村人が溺れ死んだと考えられる。

1833年庄内沖地震の津波は新潟町（新潟市中央区）にも到達していた。元禄10年（1697）時点、新潟町は、町並の長さが信濃川に沿って2600メートル、幅約550メートルの町であった。会津藩主松平容敬日記（東京大学史料編纂所謄写本）には、地震で痛んだ家や土蔵はそれほど多くはないものの、津波が

町内に入り込み、床上市したところもあった、と記されている。

1964年新潟地震では、近世新潟町地域は無被害地域となっている。しかし、寄居村（新潟市中央区）は浸水地域となっている。無被害地域に挟まれて寄居村地域だけが津波浸水地域となった理由は、寄居村地域が信濃川旧河道であったことによる。

新潟地震の津波は信濃川旧河道にそって遡上し、寄居村まで到達したのである。近世新潟町地域まで津波が到達しなかったのは、この地がもとは島であり旧河道ではなかったことによる。

旧地形を復元した上で、1833年庄内沖地震と1964年新潟地震の津波到達点を検討すると、1964年新潟地震と比較して1833年庄内沖地震の津波は大きいものであったことが理解できる。

4. おわりに

以上の内容をまとめると、次の3点となる。

- ① 津波による落橋地点は、津波到達点の指標になる。
- ② 藩・庄屋の記録など確実な史料にあらわれる溺死者の村の所在地は、その地点の地形を復元することにより、津波到達点として確定できる。
- ③ 1833年庄内沖地震による津波は近世新潟町まで到達した。近世新潟町地域は、1964年新潟地震では無被害地域で、津波の浸水地域ではなかった。しかし、1833年庄内沖地震の津波は近世新潟町まで到達した。津波到達点は1964年新潟地震よりも1833年庄内沖地震のほうがより内陸部に到達したことを示している。

参考文献

- 1) 今村明恒「奥羽西部ノ地震帯」『震災予防調査研究』95号, 21-25, 1921年, 荻原尊禮編『続古地震』東京大学出版会, 165-214, 1989年, 矢田俊文「明応地震と庄内沖地震の津波被害」『季刊東北学』28号, 106-113, 2011年
- 2) 『新潟市史 通史編2 近世（下）』新潟市, 284-285, 1997年, 矢田俊文「一八三三年庄内沖地震の津波史料」『災害・復興と資料』1号, 1-8, 2012年
- 3) 西山昭仁「安政南海地震における大坂での震災対応」『1854 安政東海地震・安政南海地震報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会, 2005年

[付記] 本稿は、矢田俊文「文献史料による1833年庄内沖地震の津波到達点の研究－新潟市内を中心に－」『資料学研究』9号, 2012年を再編集したものである。詳しくは論文をご覧ください。